





# 脚光を浴びる



それまでほとんど気にも止められなかったものが俄に注目を集めることがある。古い話だが、堀江青年（当時）がそうだった。

それまで誰も知らなかった青年が、一夜にして太平洋をヨットで単独横断して世界中から脚光を浴びたのは羨ましかった。太平洋を

一人ぼっちで横断したのが羨ましかったのではなく、脚光を浴びたのが羨ましかった。実力のない者に限って注目を集めたがる傾向がある。たしかに、私にはその気がある。他人から注目というものをされたことのない私が注目されたのは、残業帰りの9時過ぎ、ホテルから出てくるその二人と面と向かって鉢合わせの格好になって、思わず軽く会釈したからだ。女の顔は見覚えがなかったが、連れの男性は三軒先の或る会社の重役をしている近所の山田某だった。

二ヶ月後、裁判の場に証人として出廷することになった。私の証言が山田某の浮気を立証し、離婚が成立するかのカギになったのである。女房は「新聞に載るかも知れないから」と一張羅の背広にブラシをかけ、新品のネクタイを私の首に巻いて目を輝かして私を送り出した。

傍聴席は固唾を呑んで私を見つめる。証言台に向かう私の一挙手一投足に注目が集まる姿を想像しながら身の引き締まる思いで裁判所に着いた。

が、原告（山田夫人）が若い男と駆け落ちしたので裁判は突如中止。脚光を浴びることなく、私は家路につく。





# 減らさず口を叩く

おカネを叩くが 裁判長



裁判長はたまりかねて、「証人は訊かれたことだけに返答してください」と水を差した。

「おことばですが、この部屋は何ですか？」と証人。「ここは法廷です」

「つまり、あなたの職場ですね？」

「まあ、そうです」

「ということは、あなたは今、商いをしてるわけですね。勤務中なわけですね？」

「まあ、そうです」

「自給いくらくらいだか知りませんが、おカネになるわけですね？今」

「はあー？」

「大根や人参を売るのが私の商いなんです」

「ここでは一銭にもならないんです。あなたとちがつて、ただ働きなんですよ。いくらしゃべってもおカネにならない、いわば、無料奉仕のボランティアです。それをしゃべるなどはどういふことですか。あなたは、そこで黙って聞いていてもおカネになるんですから、黙って私の言うことを聞いていればいいんです」

「で、あなたは事件を目撃したんですか？しなかつたんですか？」

「ですから、さつきから言っているように、のどかな日曜の昼下がり、孫を連れて公園にいくと、山田さんの奥さんにあつたのです。そして『いいお天気ですねえ』ってあいさつを交わして・・・と、また一から話はじめた。

